

## 教育随想

ふれあい



## 若いということ

斎藤 幹夫

思えば、今から二年前の初夏の日であった。いつものように、ソフトクラブの練習のためグラウンドに出かけて行った。生徒たちは指示されているとおりに練習をやっていた。私を見つけないで、すぐにあいさつをした。私もそれに対してあいさつを返した。毎日同じことであるが、気持ちが引き締まる思いである。

どこもそうだと思うが、グラウンドが狭いため他のクラブと隣り合い、体を接するようにして練習している。その日もすぐそばで、陸上クラブの生徒が練習していた。その中の女子生徒であったが、突然私に向かって「先輩」と言っただけで、何かを話しかけようとしたが、あつて「先生」と言い直した。私も、近

気軽に話してできるふんい気を作っていたつもりであった。そのことが生徒に一歳か二歳ぐらい年上で夏休みなどにコーチに来る先輩のような感じを与えていたのかも知れない。また、それと同時に、若い先生が少なかったためか新任教師の私は、生徒にしてみればあまりに若すぎたのだろう。若く見られることは時として良いこともあるが、その反面、何も知らない青二歳のよう受け取られているような気がして、なんとなく不安をかきたてられた。少しでも生徒をリードしようと思っただけの私にはショックだった。

そんなことがあってしばらくしてから、ある先生に、「先輩」と呼ばれて苦笑の種になったことや、若すぎて生徒を指導できないのではないかとということ話をした。するとその先生は、「先輩」と呼ばれることはすばらしいことじゃないか、おれなど呼ばれたいと思っただけだ、そんなことにくよくよせずがんばれ、と励ましてくれた。それを聞いて少しは力づけられたが、おいそれと自信など持てるものでなかった。

その後クラブの生徒たちに接して気がついたことは、どんなにしかかられても、きびしい練習を指示されてもかれらはよくついてきた。そんなことから、私が捨て切れずにいた心配は弱気であったように思えて来た。そしてそのとたんに、このままで良いのだ、

このやり方をやるう、という自信のよなものを下腹に感じた。それからというものは、「先輩」とか「青二歳」とかいう言葉など二度と私を悩ますことなく、楽しい毎日が過ぎて行つた。

教師の生徒に対する気持ちが通じたときや、生徒の気持ちがわかったときは本当にうれしいものである。大会に出場して、一つのプレイに生徒といっしょになって一喜一憂するときの緊張感、生徒といっしょに無心になつて一つの目的に取り組める教師だけの特権であり、教師だけのよろこびである。そんな喜びを少しでも感じられたことは幸いであつた。クラブの生徒との心の触れ合いがそうさせてくれたのであろう。

そういうことから、「若い」ということは悩みも多いが、生徒といっしょになつて運動することもできるし、さいなにも喜んだり悲しんだりすることができ、すばらしいことだと思つてゐる。

今できることは何かということを考え、今できることを少しでも多くやるうとしてゐる毎日である。

(県立田島高等学校教諭)